

農林水産省関東農政局長賞

「米とじいちゃんとボク」

川崎市立東菅小学校

6年 木村 創

「ピーピー」フエの音のあと、「ボン」と爆発したような音がした。お米がはじけた音だ。

じいちゃんがポン菓子を作ってる音だ。お米がふくらんでさとうをとかした液体をじいちゃんとはあちゃんがまぜている。できたのポン菓子を食べるのが好きだった。

サラリーマンだったじいちゃんが会社を退職して、たまたまみつけたポン菓子のマシンをなぜか買ったらしい。ぼくが産まれる前の事だ。近所のイベントや学校行事ボランティアでポン菓子を作ってくれたじいちゃんがぼくはほこらしかった。幼稚園の頃食事にお米をたいても、おかずばかり食べて白米をなかなか食べない子供だったらしい。そこでポン菓子を牛乳をかけて母さんが食べさせてくれた。それを食べるようになってからは、どんどん大きく成長した。大きな入れもの（五才子供がすっぽり入るくらいのおけ）にいっぱいに入ったポン菓子をお茶わんにすくって食べるのもさとうがつきすぎて十粒くらいまとまっている大きなポン菓子もどれもおいしかった。

じいちゃんは、今73歳。もうポン菓子のマシーンを使うことができない。体調が悪く数年前から外出がへってしまい、ベッドのうえにいる時間が増えた。もう、じいちゃんはポン菓子を作れない。マシーンが重くはこぶこともできないし、整備ができないらしい。

ぼくの学校でじいちゃんがポン菓子を作ってくれた頃がなつかしい。一年生の時新しい友だちと一緒に、食べたポン菓子は、すごくおいしかった。

「おいしいね。」

「ぼくのじいちゃんが作ったんだよ。」

「わー。すごいね。」

こんな風に帰り道におしゃべりしながら下校する、となりを、車にポン菓子のマシーンをのせたじいちゃんが手をふりながら帰っていく。

走って友だちとおいかけると、じいちゃんは、

「あぶねえぞ。」と言ってぶっきらぼうだけど、うれしそうに笑う。

「うまい米でないとポン菓子だつてうまくならないだろう。」

そうばあちゃんとしいちゃんが相談しているのを聞いた事がある。米がうまいからポン菓子がうまいのかぼくはそう思ったらだんだん白米も食べれるようになって今では、おかわりをするほど食べる。

赤ちゃんの頃から、いつもじいちゃんと一緒に遊び「ちい散歩」を見て、その日の散歩コースを決め、母さんに内緒で、電車でタイヤ公園に行ったことがある。お互いに歳を重ねると、そのうちぼくの方が力強くなるだろう。そうしたら、ぼくがポン菓子を作ろう。

じいちゃんが産まれ育った菅の町。この町で育った米でじいちゃんにぼくがおいしいポン菓子を作るよ。それまで、長生きして、待っててね。